

『キネマ旬報』とその史料的价值

笹川 慶子

1. 『キネマ旬報』とはいかなる雑誌か

『キネマ旬報』は1919（大正8）年7月11日に創刊された。現在日本で発行されている映画雑誌の中では最も創刊が古く、震災や戦争で何度か中断されたとはいえ戦前から続く唯一の映画雑誌である。現在は月2回だが、戦前戦中は毎月1日、11日、21日の3回発行され、国内外の映画に関する紹介や批評に加えて、宣伝広告、興行調査、撮影所や業界および海外通信などの情報が掲載されていた。



創刊号の表紙。女優の顔写真とキャプションが逆になっている。（『キネマ旬報』1919年7月11日号©キネマ旬報社）

もともこの雑誌は東京高等工業学校の学生だった田中三郎と田村幸彦らが始めたファン雑誌であった。東京高等工業学校は蔵前にあり、そこから全国有数の映画興行街である浅草には歩いていける。田村と学校で知り合った田中が、田村の浅草通いにつきあううちに洋画ファンとなり、その二人を中心に学友が集まって創刊した。内容はかなりアメリカ映画偏重で、紹介記事などは田村が定期購読していたアメリカの雑誌——『Motion Picture News』と『Motion Picture World』——を種本にしている。それゆえか表紙を飾る顔のほと

んどはアメリカ人女優である。

田村と田中が『キネマ旬報』をほかでもないアメリカ映画中心に構成したのは、世界の映画界情勢が関係する。『キネマ旬報』が創刊された1910年代末といえば、第一次世界大戦を契機として国際映画市場の覇権がヨーロッパからアメリカに移り、世界中で大作のアメリカ映画が次々と公開されていた時期である。このころアメリカ映画は古典的な映画の話法をほぼ整え、グリフィスの『国民の創生』The Birth of a Nation（1915）に代表されるような、より劇的かつスピード感のある物語展開と視覚表現が世界の映画ファンの心をごっすりつかんでいた。にもかかわらず日本にはアメリカ映画を扱う雑誌がない。『活動之友』や『活動之世界』、『活動評論』など指導的な映画雑誌はあるものの、それらが紹介するのは日本映画ばかりであった。そこで田中が言いたしつべになり、おっくうがる田村を説得して創刊したのがこの『キネマ旬報』だったのである。

この雑誌の草創期には、のちに日本の映画ジャーナリズムを支えることとなる人々が同人として参加している。たとえば早稲田第一高等学院生だった古川緑波や東京帝大法科の内田岐三雄、仏文科の飯島正、独文科の岩崎昶、東京外国語学校の清水千代太、そのほか詩人の北川冬彦や松竹外国部にいた飯田心美、映画監督もすることになる岸松雄などが執筆していた。最初は洋画ばかり扱ったものの、1922（大正11）年6月1日号からは「本邦製作映画界」欄が新設され、日本映画も紹介されるようになる。

彼らの批評や評論は、当時の映画雑誌としてはめずらしく批判的な視点から論じられている。日本初の映画芸術運動を主導した^{かえりやま}婦山^{のりまさ}教正が天然色活動写真（天活）で女優を使っ^{かえりやま}てつくった『深山の乙女』（1919）を新しい日本映画のあるべき姿として賞賛する一方、田中栄三監督（溝口健二監督の師匠）の『八幡屋の娘』（1920）や『運命の影』（1920）など女形（男性の俳優が女性の役を演じる）を使っ^{かえりやま}た日活向島の新派映画を批判したのはその一

例である。ただし彼らの批評は、日本映画と欧米映画の違いを客観的に捉えるというよりむしろ、その違いを日本映画の「遅れ」「未熟さ」と捉えて批判し、日本映画の欧米化を「進歩」とみなした点で、欧米映画への強い憧れを根底にもつ啓蒙的批評であったことは否めない。



岡田嘉七郎主演の「生かしの輝き」の一場面

【生かしの輝き】の一場面（『キネマ旬報』1919年10月11日号 ©キネマ旬報社）

発刊されてもすぐに終刊になる雑誌がほとんど

だった時代において、『キネマ旬報』はわずか数年で大きく成長する。創刊時は発行部数たった500部、4ページの小冊子にすぎなかったが、日活やユニヴァーサルなど映画製作会社が広告を掲載しだすころから、その部数とページ数はしだいに増えていく。他方、編集部も学校近くにあった仲間の下宿部屋から、1920（大正9）年4月には赤坂の葵館（日活の二番館で外国映画専門の上映館）の屋根裏、翌年7月には麻布の今井町に本社を構えるまでになる。さらに1929（昭和4）年にはついに株式会社となり、押しも押されぬ大雑誌に成長する。そしてこの大飛躍を可能にしたのが、本社を関西に移転した4年間——香櫨園時代——なのである。これまでほとんど注目されてこなかったこの事実については次回の稿にゆずることにしよう。

2. 『キネマ旬報』の史的価値

この雑誌が日本の映画史研究にとって重要なのは、映画に関する多彩な情報を掲載しているというだけでなく、失われた日本映画を推察する材料を提供してくれるからだ。周知の通り、戦前の日本映画はその大半が既に失われている。原因は火災と戦災、そして人災だ。かつて映画のフィルムは可燃性だったため気温の上がる夏に発火しやすく、しかも日本のフィルム倉庫は木造なので一旦火事になるとほぼ全焼した。戦争中も数多くのフィルムが

戦火にさらされ、たくさんの映画が灰になってしまう。とはいえ、ここまで無残な保存状態は火災や戦災のせいばかりでもない。当時の日本に映画を文化財とみなす意識が薄く、その保存にさしたる注意を払ってなかったことも大きな要因といえよう。じっさい、かつての雑誌社のなかには、映画館に頼んで上映中のフィルムからコマ（写真）を切りとってもらい、そのコマを掲載するところもあった。いかに映画を保存する意識に乏しかったかがわかるだろう。こういった状況だから戦前の日本映画を写真付きで紹介し、失われた映画の一端（もしかしたら1コマ）を垣間見させてくれる『キネマ旬報』は現在の我々にとってたいへん貴重な史料となる。

『キネマ旬報』はまた、当時の人々が映画をどう見ていたのかを知るための重要な情報源をも提供してくれる。同誌には映画の紹介や批評だけでなく、金粉銀粉を使った三色刷りの折込広告や映画館の興行景況、読者評など映画の受容にかかわる様々な情報も記録されている。発刊から約90年の歳月が経ち、戦前の映画体験者のほとんどが生存していない今にあって、そういった記録は映画が当時の人々といかにかわったかを想像するのに必要な得がたい情報を与えてくれる。しかも『キネマ旬報』は東京だけでなく大阪や京都、名古屋、博多など地方都市の状況、さらには文学や建築、芸能、思想など幅広い見地から映画文化を捉えており、その幅の広さはほかに例を見ない。それゆえ『キネマ旬報』は、日本の映画文化史研究にとっても最重要の基本文献だといえるのである。

かつてどのような映画が日本で製作され、そのまわりにどんな映画文化が存在していたのかを知るのに『キネマ旬報』ほど重要な雑誌はない。しかしその『キネマ旬報』も現在ではほぼ散逸し、とりわけ戦前のバックナンバーはほとんど残っていない。全国で一般利用できるのは京橋のフィルムセンターか早稲田演劇博物館、国立国会図書館くらいである。『キネマ旬報』は映画作品とはまた別の角度から、失われた過去を現在に伝え、未来につなぐ貴重な文化財であるがゆえに、その活用と保存の折り合いをどうつけるかが今後も重要な課題となるのだろう。

文学部准教授